

言行一致の人

武藤嘉文

私と大平総理との出会いは、私がまだ一年生代議士で商工委員会の理事になった時であったと思います。日米間の繊維問題がやかましくなりかけた頃で、「アメリカの繊維業界があぐらをかいていたために日本等に追い越されかけて騒いでいるのであって、自由主義陣営のチャンピオンであるアメリカがこのようなことをいうのは、およそ筋の通らない話だから決して安易な態度をとっていただいては困る」と強く何回となく申し上げました。その時いつも真剣に私の話の話を傾けていただき、「俺は、日本の通産大臣だ。日本の繊維業界の実情もよくわかってる。いくら相手がわが国にとって友好関係を維持しなければならぬアメリカであっても、筋の通らない話を押しつけられ、わが国の業界が苦しい状況に追いこまれるようなことは何としても避けなければならぬ。俺は間違ったことはしないから心配するな」ということでした。そして終始一貫その考え方がんばっていたいただきました。私は、その時から大平総理にホレこんでしまいました。

その後、親交を深めさせていただき、いろいろの場合に遭遇するたびに、私の大平総理に対する尊敬と信頼の念は高まっていきました。私の次男が内田常雄先生のお嬢さんと結婚することになり、その仲人を大平総理ご夫妻にお願したわけですが、ちょうど結婚式当日が総裁選の予備選の真最中で、予備選であちらこちらへ挨拶にいかねばならない総理（当時は幹事長）を長時間拘束することになってしまい、特に私はその頃中曽根派に所属していたため、本選挙の時は必ず大平総理を支持するが、予備選はあくまで中曽根支持で岐阜県において中

曾根票が多く出るようにがんばりますからと申し上げていた関係上、大変心苦しく思い、披露宴の途中で抜け出していただいて結構でありますからと申し上げたのですが、「いや、かえって自分の時間ができていいよ」と最後までお付き合いただいた。いくら自分の総裁選のために忙しくても、仲人を引き受けた以上、最後までつとめるのが仲人の責任だというお気持であつたようです。

予備選の終わる頃、大平邸に呼ばれていった時、たまたま福田総理との間の総裁禅譲の約束が反古になつたことについて、「約束したことを平気で変えられる人はうらやましいなあ、俺にはとてもできないことだよ」といつておられました。口数は少ないが一度いったこと、約束したことは必ず守るといつ言行一致の方でありました。

また、あの首班指名をめくつての四十日抗争の時、「自分が首相として不適任ならいつやめさせられてもよい。しかし自分の地位は予備選で多くの党員の投票によつて作られたものだ。自分から勝手にやめたらその人達に申しわけない。党大会に代る議決機関である議員総会においてでも多数の人達からやめろといわれれば、いつでもやめる。決して総理の座に恋々としてゐるわけではない」とよくいつておられました。当時その言葉に対して批判をする人もいましたが、総理としては責任感から大真面目だったので。

第二次大平内閣が発足してから政経文化パーティーが各地で開かれましたが、栃木県のパーティーに総裁が出席しなかつたからといつてもう一度栃木に行かねばならなかつた時、「俺が出ないと駄目ならこれから必ず出る」といわれ、それまでは党三役が代つて出るところもありましたが、それ以降、渡米の時以外、全部出られました。私もほとんどのパーティーにお伴しましたが、同じ日の昼は広島、夕方は名古屋でパーティーが開かれ、夜、羽田に帰つた時などは大変お疲れの様子で、「ダブルヘッターはやはり疲れるなあ」とおっしゃつておられました。とにかく責任感の非常に強い方でありました。

(衆議院議員・第二次大平内閣農林水産大臣)